

7th Anniversary

薄紫のウィークエンド

Pale Purple Weekend

長編青春ミステリー

赤川次郎

Akagawa
Jirō

文庫オリジナル



光文社文庫
KOBUNSHA BUNKO



光文社文庫

文庫オリジナル／長編青春ミステリー

薄紫のウィークエンド

著者 ^{あか}赤 ^{がわ}川 ^じ次 ^{ろう}郎

1991年9月20日 初版1刷発行

発行者 大 坪 昌 夫
印刷 凸 版 印 刷
製本 明 泉 堂 製 本

発行所 株式会社 光 文 社
〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13
電話 東京 03(3942)2241(代表)
振替 東京 6-115347

© Jirō Akagawa 1991

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-71385-8 Printed in Japan

ル文社文庫

江苏工业学院图书馆

文庫オリジナル／長編青春ミステリー

蔵書のクマド



『薄紫のウィークエンド』目次

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
札束の重さ	時の流れ	秋子	退屈な日	にぎやかな噂	パーティへの誘い	接点	ペントハウス	早退	語り合い	借金	新しい恋	長い夏の後
160	146	134	122	110	99	85	73	59	46	33	22	9

	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
解説	エピソード	背徳	騙された男	目前の死	写真の男	惨劇	不運	停ったエレベーター	婚約	パーティーへ	嘘
金春智子 こんばるちもこ											
313	303	287	276	262	250	236	224	210	198	185	176

——
杉原爽香、十八歳の秋

1 長い夏の後

「お願い……」

杉原爽香は、電話のプッシュボタンを押しながら、祈るように呟いていた。ピツ、ピツ、という音が、まるで電話に隠れている妖精の笑い声でもあるかのように聞こえた。

「家において……。今日子、家においてよ」

少し間があつて、ルルル、ルルル、という呼出し音。待つほどもなく、向うが出た。
「浜田です」

一瞬、今日子かと思つたが、そうではない。母親の声だと分つた。

「あの、杉原ですけど」

「あ、爽香さん？ 久しぶりね。お元気？」

「ええ、まあ……」

「そうそう。お父様、どうなの、具合は？」

「はい、少しずつは良くなってるんですけど……。あの、今日子さん、いますか」

「今日子ねえ、泊り込みの塾に行って、明日の夜でないと帰って来ないの」

爽香は、ちょっと目を閉じた。——やっぱりそうか。やっぱり！

「何か急ぎの用なら——」

「いえ、いいんです」

と、爽香は急いで言った。「またかけますから」

「そう？　じゃ、もし電話でも入ったら、爽香さんから電話があったと言っとくわ」

「お願いします」

「お父様、早く良くなれるといいわね」

「ありがとうございます。どうも失礼しました」

爽香は電話を切った。——テレホンカードが戻って来て、ピーッ、ピーッという音が、爽香をせついた。

今日子。——やっぱりか。

電話ボックスを出る。風はもう、少し冷たくなっている。十一月も近い。

夜の十時近く。爽香は、ほとんど人通りの絶えた道に立って、どうしたものかとしばし迷っていた。

いや——ここで待ち合わせているからには、帰ってしまうわけにも、一人で行くわけにもい
かない。ただ、一人で行かなければ、向うは受け入れてくれないかもしれない。

腕時計を見る。——約束の十時まで、あと七分。明男^{あきお}は、何ごとも手早い方ではない。たぶ
ん少し遅れて来るだろう。

少々方向感覚に欠けるところもあるから、真直ぐ、この交差点へやって来れるかどうか。
——もちろん、そんなに一刻を争うという事態じゃないけれども。

今日子……。

爽香はシャッターの下りたビルの角にもたれて、そのビルを見上げた。ワンブロック先にあ
る、十五階建の、黒いビルである。

今日は土曜日で、大方の会社は休みだろう。たとえ開けていたとしても、十時にはすっかり
閉めているはずだ。

その黒いビルも、窓が黒く塗り潰されているかのようで、夜、こうして少し離れて見ると、
ただのつぺりとした、巨大な黒い石にも見える。

私も、就職したら、あんなビルの中で働くんだ、と爽香は思った。何だか大きな墓石みたい
にも見える。あのビルの中にも、人間の営み^{いとな}があつて、人間の愛憎があつて、人間の喜びと涙
がある……。

最上階、十五階の窓だけ、ぼんやりと明るいのが分る。——今日子。

爽香は首を振った。

今日子が、おそらく、あそこにいる。あのビルの最上階に。

本当に……何てことだろう。

高校三年生。——本当ならば、わき目もふらず受験勉強をする時期。ただし、外の大学を受ける者だけが。

爽香の親友、浜田今日子も、医大に進むというので、今の私立から、大学は外へ出ることになっている。今日子は頭もいいし、医大受験も絶対安全、と教師から折紙をつけられていた。

その点爽香は——。

「ま、どうだ、このまま上に行っちゃ？」

と、先生からアッサリすすめられる程度のできであった。

高三の秋。——これから、受験生にとっては本番。体を悪くしないように気をつかいながら、いかに能率良く勉強するか。

でも爽香は心配していなかった。今日子はきちんと自分でスケジュールを組んで勉強する子だし、目標を定めたら、必ずそれを達成してしまう、頑張り屋でもある。

その辺、親友とはいえ、割と「成り行き任せ」のところのある爽香とは大分違うのだ。——

爽香から見ると、今日子は少々一本気に過ぎるところがあつて、「少しはリラックスしたら」と言つてやりたくなる時もある。

しかし、今日子が勉強に一心に打ち込んでいるのには、他の理由もあつて、爽香はそれをよく分つていたので、何も言わなかつたのだ。多少、責任も感じていたし……。

今は、ともかく早く受験がすんで、今日子が無事医大に合格したら、二人してどこかへ旅行でもしよう、と……。二人はたまに会うと話していたものだ。

それが——今日子にあまり会わなくなつたのは、三年生になつて、受験組と、そうでない組とはつきり別枠の授業になり、教室や登下校の時間も違つて、ほとんど顔を合せなくなつてからだった。

それに加えて……そう、この夏はめちやくちやだった。

何て夏だったろう！ できることなら、時間をさかのぼつて、カレンダーの七、八月を破り取つて、捨ててしまいたいくらい……。

爽香は腕時計をまた見た。——ちょうど十時。

やっぱり明男は遅れて来るんだ。

爽香はコートのえりを立て、腕を組んだ。

「ねえ、重くて暑い！」

爽香は、息も絶え絶えになって、言った。

オーバーではない。満二歳まで、まだ少しあるというのに、爽香の姪——兄夫婦の子、綾香は、標準体重では、すでに二歳と六ヵ月を突破していた。

しかも、「爽香おばさん」にべたっと抱っこされたまま、ぐっすりと眠り込んでいるのである。

「もうちょっと我慢してくれ。な？」

と、兄の充夫が拝むように言った。

本当に拝むには、両手に一杯の荷物で、おそらく十センチも上げられなかっただろう。

もちろん、爽香だって、充夫が、綾香を抱っこしてくれると思っていなかったわけではない。ただ、三十度を軽く越える炎天下、綾香を抱っこして歩いていて、ともかく文句を言ってみたかったのである。

「もうじきだから。——悪いな」

と、充夫は少し気がひけている様子で言った。

そんなことぐらい分ってる。——何しろ、自分の家へと帰ろうとしているのだから。

普通なら、あとほんの数分、若い爽香の足取りなら、アツという間についているはずなのに

……。ともかくこの荷物！ 放り出しといて、後で拾いに来るってわけにいかないのだから……。

——爽香は、母の真江^{まきえ}、兄、充夫とその妻の則子^{のりこ}、そして綾香というメンバーで、夏休みの初め、温泉に行つて来たところだ。

八月に入ると、行楽地も混雑するというので、七月、爽香の学校が休みになるとすぐ、出かけることにしたのである。父の杉原成也^{しげなり}はお留守番、というより、仕事も忙しくて、出られなかったらしい。

会社そのものが八月十日前後から、お盆の休みに入るので、その前に休むわけにもいかなかったのだろう。それに父の成也は、あんまり外へ出るのが好きでない。暇ができたら、家で引っくり返って本でも読んでいた方がいい、というタイプである。

この五日間、さぞかし、のんびりと羽を伸していたことだろう。

「やれやれ！」

充夫が、家の玄関に着いて、やっと荷物を下ろし、肩で息をついた。汗がタラタラと流れ落ち、シャツもべっとりと肌にはりついている。

「何やってんの！ 早くチャイム鳴らしてよ」

と、爽香は苛々しながら言った。